様式 C-7-2

自己評価報告書

平成２２年　５月２５日現在

研究種目：若手研究 B
研究期間：2007～2010
課題番号：19730346
研究課題名（和文）　批判理論における〈承認〉概念と「多元的社会」の構想理論

研究課題名（英文）“ Recognition ” in the Critical Theory and its Imagination for Plural Society

研究代表者　出口　剛司
（明治大学　情報コミュニケーション学部　准教授）
研究者番号：40340484

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学
キーワード:承認　規範理論　フランクフル学派　批判理論　A. ホネット　ネオリベラリズム　自己実現　心理主義

１．研究計画の概要

本研究の課題は、隣接領域である政治哲学、社会倫理学といった規範理論の研究成果を積極的に取り入れ、多元的社会の実現をめざす社会構想を理論的、経験的に根拠づけることにある。その手がかりとして〈承認〉概念に注目し、フランクフルト学派の批判理論の刷新を押し進めているアクセル・ホネット及び彼の率いるフランクフルト大学社会研究所による研究成果を再構成する。さらにその規範的前提、経験的分析を検証するとともに、ネオリベラリズムの問題性、それに代わる社会構想の可能性について明らかにする。

２．研究の進捗状況

本研究の主眼は、メタ理論と規範理論の関係性を明らかにする点にある。本研究ではすでに、〈承認〉というコンセプトが、経験的分析を支えるメタ理論と、批判及び社会構想を基礎づける規範理論の接点に位置することを明らかにしている。それによると、承認とは、一方で社会関係、社会集団、法・制度の次元で発生する多様な社会的闘争の動機及び要因を分析する枠組みであり、また他方で闘争の動機、要因であるがゆえに社会の制度設計を行う際の規範的基礎にもなりうるものである。

とくに社会関係の次元では、アイデンティティの形成（発達段階）及びケアの場面において相互の承認的関係の構築が極めて規範的な意味で重要性を持ち、その相互作用のプロセスで自己肯定的な関係性が維持される。現在、その理論的分析を行うと同時に、ケアの場面における承認的関係がもつ意味について経験的な分析を進めている。

また社会集団、法・制度の領域では、ネオリベラリズムの進展とともに、新たな社会病理が拡大しつつあるという現状にある。それに対し本研究では、ネオリベラリズムに対する承認論からの批判的分析を展開しており、現在、その一層の精緻化を進めている段階にある。具体的には、高度経済成長期から 70 年代にかけて拡大した親密圏、職業組織、法・制度の場面で実現した理想的規範が、90 年代以降のネオリベラリズムのもとで抑圧的規範へと反転するメカニズムを理論的に解明し、そのメカニズムのなかで、精神的抑圧をはじめとするさまざまな社会病理が発現していることを明らかにしている。

現在は、これら承認概念がもつ、社会関係、社会集団、法・制度の領域における経験的、理論的、規範的可能性の検証、一層の精緻化を進めつつ、それらの成果を「ネオリベラリズム批判と社会構想の理論」へと収斂させる作業を進めている。

３．現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。
当初設定した社会関係、社会集団、法・制度に関わる理論やその経験的可能性に関する研究は順調に進みつつあるが、社会的排除、公正・分配に関する研究に関しては、多文化主義との関連を見据えつつ、さらなる展開が

必要と考えている。

４．今後の研究の推進方策

まず研究計画に関しては、これまで進めてきた理論的、経験的分析の精緻化をはかる。とくにネオリベラリズム批判と社会構想を支える自己アイデンティティと承認の関係を心理主義と関連させつつ明確にしていく。また、新たに多文化主義や公正・分配問題における承認論の可能性を探求していく。

つづいて成果発表に関して 2009 年は専ら学会報告を中心に行い、さらにアクセル・ホネット氏とともにワークシップを開催するなど、一定の成果を得たが、2010 年度は雑誌論文、図書を中心とした活字による成果発表に力点を置く。

５． 代表的な研究成果
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①出口剛司、「アクセル・ホネットの承認論と批判理論の刷新：批判理論はネオリベラリズム的変革をどう批判するのか」（『現代社会学理論研究』 第 4 号、2010 年、pp.16-28、査読無し）

〔学会発表〕（計 10 件）

①出口剛司、「アクセル・ホネット氏『物象化』へのコメント―承認論による概念再構築と社会批判」（英日報告原稿配布・日本語報告、日本社会学理論学会特別企画ワークシップ、2010 年 3 月 21 日、明治大学）
②Takeshi Deguchi、Comment on Professor Honneth’s Lecture “The Fabric of Justice”: State Centricity in Japan as an Unexpected Result of the Reconstructive Approach （国際会議・英日原稿配布・英語報告、International Conference: Bonds and Boundaries: New Perspectives on Justice and Culture、2010 年 3 月 20 日、立命館大学）
③出口剛司、「自由はいかなる意味で擁護され、いかなる意味で批判されうるのか？―解放としての自由／イデオロギーとしての自由」（唯物論研究協会大会、2009 年 11 月 8 日、金沢大学）
④出口剛司、「仏教ホスピスの可能性と限界Ⅰ―象徴的資源としての教義と宗教的空間の形成」（日本社会学会大会、2009 年 10 月 12 日、立教大学）
⑤出口剛司、「社会学的理論構築における承認論の可能性―テイラーとホネットの対話から」（日本社会学理論大会シンポジウム（ホネット担当）、2009 年 9 月 19 日、千葉大学）

〔図書〕（計 2 件）

①出口剛司他『躍動するコミュニティ』（共著・晃洋書房、2009 年、pp.87-126(総頁 203)）